

## エッセー

ジェンダーをテーマとした授業の試み  
—全カリ総合B「現代社会とジェンダー」のコーディネーターを務めて—

近藤 弘

2000年度より、全学共通カリキュラム総合教育科目B群（以下全カリ総合Bと略す）に関して、学部以外（たとえば研究所、事務部局等）からもエントリーが可能となった。この科目は「同じ1つの問題をめぐって複数の専門分野から提供される複数の見方を1つの科目の中で総合しようとするもので、そのために、専門分野の異なる複数の担当者がコーディネーターを中心に緊密に協力し合いながら授業を進める」（「全学共通カリキュラム履修要項」より）性格を持っていることから、「ジェンダー」をこの科目で取り上げることがふさわしいと考えてジェンダーフォーラムもエントリーしたのである。

毎回、「現代社会とジェンダー」という科目名のもとにサブテーマを設定し、それぞれにふさわしい学内外の専門家をゲスト・スピーカーとしてお招きし、講義をお願いしてきた。また、時にはワークショップ、受講生によるミニシンポなど、多様な授業形態も取り入れてみた。

この授業は科目の内容から出席を重視し、近年は欠席1回について、ジェンダーフォーラム図書室に配架されている文献を1冊選んで小レポートを作成し提出した場合およびフォーラム主催のジェンダーセッション等に参加し、感想文を作成して提出した場合は1回の出席分とするという方法をとっている。これは欠席分の内容を文献およびセッション等で補ってもらうねらいがあると同時に、ジェンダーフォーラムへの理解を深めてもらう機会とするこ

とも考えたからである。フォーラムへ文献を借りに来たり、セッションへ参加した後、フォーラムへ顔を出すようになった受講生も少数ではあるがおり、このねらいはそれなりに効果を上げていると思っている。また、毎回出席票代わりにレスポンスシートを授業の終わりに記入させており、出席状況の把握、受講生の授業への反応などを確認する材料としている。あわせてゲスト・スピーカーにもコピーをお送りし、受講生の反応をお伝えしている。

なお、コーディネーターは私が2001年度をのぞいて務めてきたが、2003年度からは岸澤初美氏を全回出席の兼任講師としてお願いし、毎年企画段階から参加していただき、いわば二人三脚の形で取り組んできた。

今年度まで計9回にわたってジェンダーをテーマとした授業を試みてきたことになるが、この授業を通して考えてきたことを少し述べてみたい。

ジェンダーをテーマとして授業実践した日野玲子は、その特徴を以下のように述べている。

女性学・男性学・ジェンダー研究を教育の場に取り入れることは、単純に知識を伝達して済む話ではない。女/男という性を切り口に、性別によって固定化された生き方を問題としたり、それを支える文化や制度を問い直すなど、各人がどのような生き方をするのか、どのような社会のしくみをつくってゆくのかといった、価値観を教育の課題とする、きわめて実践的な活動に

なる。

（日野玲子「『ジェンダー論』の授業をつくる」藤田・黒崎・片桐・佐藤編『＜教育学年報7＞ジェンダーと教育』1999年、世織書房、144頁）

どの授業でもそういう面をもつのであろうが、特にジェンダーに関わる授業は「単純に知識を伝達して済む話」ではなく、各人の生き方に関わる価値観を課題とする側面が強い性格を持っている。その場合、まず直面するのは評価をどうするかという課題である。先に紹介した日野は自分の授業に対する学生の反応（評価態度）を共感、反感、拒否の三つに分けているが、そうした学生の反応（評価態度）に対して授業者はどのような評価を下すべきかという問題である。我々の授業でもほぼ同じような反応が見られた。その際、共感には高い評価を与え、反感や拒否には低い評価を与えることで済むだろうか。ことが生き方に関わる以上、そう簡単に評価を下すことは難しいと思われる。我々の授業でもいろいろ議論した結果、現在は出席状況、レポートの提出の有無といったいわば客観的な基準で評価をしている。はたしてそれでよいのかという問いをもちつつではあるが、未だに結論は出ていない。

実はこの点は、次のような指摘とも関わっている。

この指摘（女性学教育は「フェミニズムの視点が不可欠」であるが、「単なるフェミニズムイデオロギーの注入（＝教化）」であってはならないという指摘—引用者注）に私も同感するが、教師である私の中で「隠れたカリキュラム」として作用する女性学の価値観と、単なる「フェミニズムイデオロギーの注入」を、いかに相対化していくのか。女性学を教育の場に生かしてゆく上で、

どのような配慮や工夫が必要なのか、これを明らかにする必要があるだろう。（同左165頁）

この指摘は「女性学」を「ジェンダーをテーマとした授業」と置き換えれば、ジェンダーをテーマとした授業を実践していく授業者の「隠れたカリキュラムとして作用する」ジェンダーに対する価値観と「単なるジェンダーイデオロギーの注入」とをどう相対化するかという課題である。このことは先の評価をどうするかという課題とも重なって、授業者にとって重い課題である。

ジェンダーをテーマとした授業においてどのような授業が望ましいのか。フェミニストペダゴジー（フェミニスト教育学）ではこうした課題に取り組み、一定の成果を上げつつあるといわれているが、そうした成果に学びつつ、ジェンダーの授業実践を通して、いわば「ジェンダーペダゴジー」の確立を目指すことが今後の課題であるように思われる。

なお、我々の試みてきたこの授業実践に関しては、以下の文献に詳細を報告してきたので、参照していただければ幸いである。

近藤弘「全カリ『現代社会とジェンダー』報告」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第2号、2001年3月

同「大学におけるジェンダー教育実践の課題～受講生の意識変容を中心に～」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第3号、2002年3月

近藤弘・岸澤初美「全カリ『現代社会とジェンダー』活動報告」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第10号、2009年3月

（付記）なお、本学においてジェンダー

関連科目はこの科目以外にも多く展開されている。詳しくは『立教大学におけるジェンダー関連科目の現状と課題』

と題する調査研究報告書（立教大学ジェンダーフォーラム編、2007年5月刊行）を参照されたい。

こんどう ひろし  
（本学学校・社会教育講座教授／  
立教大学ジェンダーフォーラム所長）